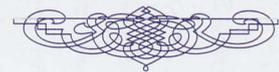




## 由緒ある杏雲堂病院が 125周年記念講演会



### 酒井シヅ、杉村隆両博士が講演

「思ふに医道は病者を診て之を救はんとする慈悲心に出るもので射利の目的にて起こつたものではない。医は仁術である云々」。これは、本年度創立125周年を迎えた財団法人佐々木研究所（理事長・黒川雄二）附属杏雲堂病院の開祖・佐々木東洋の手記の一節である。

財団では、病院の開院記念日にあたる6月1日、東京・お茶の水の佐々木記念ホールで、関係者を招き内輪の記念講演会を開いた。会は黒川理事長の「創立記念日について」の説明のあと、医史学



黒川雄二  
財団法人佐々木研究所理事長

の権威・順天堂大学医学部医史学研究室客員教授・酒井シヅ博士の「創立者佐々木東洋の生涯」と国立がんセンター名誉総長・杉村隆博士の「佐々木隆興先生から今日まで―発がん研究の流れ」と題する2つの興味深い講演が行われた。終わりに、去る4月に病院長に就任した前国立がんセンター東病院院長・海老原敏博士の挨拶で幕を閉じた。

この由緒ある病院の歴史の紹介のため当日を再現してみよう。最初に挨拶に立った黒川理事長は、病院の歴史は明治15年（1882年）6月1日に佐々木東洋が東京神田駿河台に杏雲堂醫院を開いたときに遡る、と口を開き以下のように話を進めた。「佐々木東洋（1839～1918）

は、長崎でオランダ医学を学び、東京に戻り大学東校（東大医学部の前身）の医長になり、そのあと博愛舎、東京府立病院を経て36歳で大学東校病院長に就任、その後、政府の脚気病院で洋方医部門を担当してから神田駿河台に杏雲堂醫院を開いた。その後、東京府医師会本部幹事、神田区医師会会長を歴任している。第2代政吉（1855～1939）は、大学東校を卒業後、5年間ドイツに遊学し、帰朝後日本人として最初の東京帝国大学医科大学教授に就任、さらに本邦医学博士第2号を授与されている。

一方、自邸敷地内に研究室（佐々木研究所の母体）を作り、当時の国民病であった結核治療のため平塚市に結核療養所を設置した。第3代の佐々木隆興（1878～1966）は、ドイツに5年間留学し帰国後、京都帝国大学医学部内科教授を務めてから杏雲堂醫院院長に就任。當時は、まだ私財だった研究所および2つの病院などすべてを寄付し、財団法人佐々木研究所を

設立し初代理事長となった（病院はこれにより、財団法人佐々木研究所附属杏雲堂病院となる）。その目的は、佐々木東洋が掲げて以来の「医学の進歩に寄与し、医業をもって社会に貢献する」という理念を永続かつ実践することにあった。院長職と同時に研究を行い、生化学さらに吉田富三博士と共に発がんにおける業績により、2度の学士院恩賜賞を贈られたほか、文化勲章を受賞、文化功労者にも推戴された」と話した後、現在までに14人の院長が就任していることなどを説明した（別表参照）。

### 篤学精励、卓越した学識・技量兼備の 佐々木東洋

講演に移り、まず酒井シヅ博士が登壇、佐々木東洋の生涯について詳しく紹介した。同博士は、わが国における医史学の第一人者で、東洋が篤学精励の人であり、卓越した学識と技量を兼ね備えて患者から高い信望と尊敬を博したことから説き起こし、静かな語り口で参会者を魅了した。それによると、東洋は天保10年（1839）6月に江戸本所四ツ目に外科兼薬屋を開いていた佐々木震澤の長男に生まれ、18歳のとき、西洋医を志して下総佐倉の順天堂に佐藤泰然を訪ねて入門、間もなく後継者の佐藤舜海（尚中）に



酒井シヅ  
順天堂大学医学部医史学研究室客員教授

歴代杏雲堂醫院・病院院長  
明治15年6月1日～平成19年6月1日 (1882-2007)

	院長名	年数	前職
1	佐々木東洋	16	杏雲堂醫院
2	佐々木政吉	20	杏雲堂醫院
3	佐々木隆興	22	杏雲堂醫院
4	佐々木廉平	20	杏雲堂醫院
5	塩谷卓爾	9	杏雲堂醫院
6	上田英雄	1	東大医学部
7	五味二郎	4	慶大医学部
8	松井良吉	4	杏雲堂病院
9	佐々木智也	8	東大医学部
10	坂本二哉	3	東大医学部
11	天神美夫	4	杏雲堂病院
12	松崎 淳	6	杏雲堂病院
13	高橋俊雄	4	都立駒込病院
14	海老原敏		国立がんセンター東病院

師事、舜海の長崎留学に頼み込み、私費で同行、オランダ海軍軍医ボンベの教えを受けた。

文久元年(1863)に江戸に戻り、実父を助けて亀沢町で開業、長崎帰りの若先生は高い人気を博した。明治に入り新政府から求められて大学東校に勤務後、明治5年(1872)には職を辞して翌年には開業医に戻った。しかし7年になると要請されて新設の東京府病院副院長、さらに8年に東京医学校に3年の通学コース新設とともに大学東校病院長に就任。9年に辞職し駿河台で開業した。しかし、西南戦争の勃発で、明治10年には1等軍医正として従軍、戦争集結とともに家業に戻るといように、目まぐるしく職が変わった。これは明治初年、医学制度が次々と変わるのに、その要となる西洋医学者が少なく、東洋は得難い存在であったためである。

明治11年には政府から出仕を命じられ西洋医学部門の責任者として、新設の脚気病院に勤務

したが、2年間で閉鎖となったため、私費で駿河台西紅梅町に脚気病院を開院したが、同15年にこれを解消、杏雲堂醫院を開院した。その後、後継者の政吉、次いで隆興が院長となり、発展していくのを見届け大正7年10月に80歳で大往生を遂げている。

発がん研究に大きく貢献の佐々木研究所

続いて杉村隆博士がマイクを握った。杉村博士は、国際的にも知名度の高いがんの生化学者で、学士院恩賜賞、文化勲章の受賞者として知られる。「佐々木研究所は、日本のがん研究に直接、間接に大きな影響を与えた。外国の発がん研究者との会話にも、山極勝三郎先生のご業績について、佐々木隆興、吉田富三両先生のお話が出てきた。何人かの知人を東大医学部本館の資料室に案内したが、彼らが山極、佐々木、吉田の三先生の標本に感銘を受けた様子を目のあたりにした。



杉村 隆  
国立がんセンター名誉総長

私は1回だけ、佐々木隆興先生の講演を日本生化学会で拝聴したが、忘れ得ない印象をもった。戦後、吉田肉腫、複数の吉田腹水肝がん株を使わせていただき、研究を楽しんだ。井坂英彦、小田嶋成和、佐藤博、高山昭三、長瀬すみといった諸氏と佐々木研究所で相集い、全く非公式な研究会をもった。佐々木隆興先生や吉田富三先生も顔を出されることもあった。やがて井坂先生は、教授として鹿児島大学に、小田嶋先生は国立衛生試験所部長としてそれぞれ転出され、会は自然消滅したが、そのあとも長く佐藤博士から腹水肝がんや吉田肉腫を快く分けてもらい、研究を進めた時代もあった」と往時を回顧したのち「今日、流行のように皆が唱える発がん研究の流れ、「多段階発がん」「がんの個性」「がんの遺伝子変化」「epigenetic変化」等のコンセプトは、ずっと前に佐々木研究所の中心にごめいていた」などと語り、壇を下りた。終わりに海老原院長が閉会の挨拶を述べたが、その中で将来構想として、杏雲堂病院ががんに特化した病院を目指していることを明らかにした。

(医事評論家 伊藤 正治)

(注) 病床数Ⅱ一般病床208床(5病棟)。診療科目Ⅱ内科、リウマチ科、乳腺外科頭頸部外科など14科、1検診センター